

平岩弓枝

へん
弓
枝
下

平岩弓枝

くこつ
下



へんこつ 下

昭和五十年六月三十日 第一刷

著者 平 岩 弓 枝

発行者 檜 原 雅 春

発行所 株式会社 文 藝 春 秋

〒一〇二 東京都千代田区紀尾井町三

印刷所 精 興 社

製本所 加藤製本

万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

へんこつ・下

目次

二つの恋	5
螢屋敷	17
その夜	30
嫁迎え	43
初夜	56
亀裂	68
花相似	81
影と影	94
消える	107
米櫃の中	120

不帰島へ	134
唐通辞	147
三女神	163
蘭医シーボルト	179
その男	195
江戸へ	208
待つ人々	223
帰雁	237
行く春	250

装
幀
粟
屋
充

へ
ん
こ
つ
下

二つの恋

犬塚新吾は、このところ非番というと昌平橋界限を張っていた。

昌平橋には中野播磨守清武の屋敷がある。

浪路が女中奉公という名目で、その中野家へ入ってから、すでに三カ月がすぎようとしていた。

三月、弥生の月は、大奥の女中達の宿下りの時ときまっていた。

いつの間にか、武家屋敷でも、それにならって三月を女中の宿下りにときめているところが多い。

もっとも、大奥の場合、宿下りが許されるのはお目見得以下の女中達で、それ以上の身分のものは親の病気でもないと宿下りは許されなかった。將軍の御手付ともなれば、

將軍の存命中は一生、大奥を出ることはない。

宿下りの許される者も、奉公に上って三年目に一度で六日間、更に三年目に十二日間、更に三年目に十六日間と、三年目ごとに限られていた。

中野家の場合是一年に三日の宿下りときまっていて、その月は、やはり三月中となっている。

が、浪路のように今年、奉公に上った者は来年の三月にならないと宿下りは許されないきまりだという。

これは、浪路の兄の笠松京四郎にしても思いがけないことだったらしい。

大名家ではあるまいし、如何に隠然たる勢力があっても、成上りの二千石の中野家に、それほど厄介な奥向きのきまりはあるまいと高をくくっていたのが間違いであった。

最初、話のあった時に、そうしたきまりは一言も話されていない。といって、今更、慌てても当人は奉公に上ってしまったているし、どうにも仕方がなかった。

相手は町方の手の届かない武家屋敷の中のことである。「お前らしくもない馬鹿をやったものだ」

新吾には、最初からそうした予感がなかったわけではなかった。

転んでもただでは起きないという中野清武が、町方で中で、彼の身辺に探りを入れている男が誰か知らないわけもないし、当然、笠松京四郎や犬塚新吾に注目しているに違いないのだ。

いってみれば、笠松京四郎が相手をやや甘く見過ぎて、浪路を奉公に出したのが失敗であった。

なんにしても、こうなってから京四郎を責めてもはじまらない。

「定廻りの旦那などといわれて、町方じゃ、けっこう幅もきくし、力もある。そういう中で三百六十五日、暮して来てみりゃ、つい、自分の力を過信したくなるものさ」

人間、誰しも、自分の生きている範囲しか目が届かないものだし、その中で権力があると、もっと広い世界へ出て、その力が通用するような錯覚にとらわれやすい。京四郎の計算違いを、あながち責められなかった。

新吾ですら、心のどこかで、やはり中野清武を軽くみていた節がある。

いってみれば、將軍家に女を献じて出世した螢大名という軽侮が、心のどこかにあったに違いないのだ。

浪路に宿下りの機会がないということは、来年の三月ま

で、新吾は浪路と逢えないわけになる。

恋とは可笑しなもので、今まで、子供の時から隣家に住んで、一日に一度はいやでも顔をみるし、声をきける立場にあった時は、浪路への恋を、新吾はさほどのものに感じていなかったのに、逢えないとなると、身を切られるような苦しさともどかしさが襲ってくるのだ。

恋人というよりも、妹のような存在で、いとしいとか可愛いとか思うことがあっても、その肉体に激しい欲望を感じたことは殆んどないといってよかった。

一つには、晴れて妻にするまでは、清らかなままでおいやりたいたいという新吾の潔癖さと、長年、兄妹のように暮した馴れから、急に男と女になり切れない照れのようなものもあった。

だが、浪路は中野家へ奉公に行くときまった前夜、はじめて新吾の腕にすべてを投げかけて来た。恥らしいを忘れたように、切ないまでに恋を訴えて来た。

新吾も亦、そんな彼女にかつてないほど激しく抱擁もし、唇を吸い、肌を手を触れた。

その、はじめての記憶が、今となっては新吾を苦しめた。もはや、新吾にとって、浪路は、かわいい妹のような娘

ではなくなっていた。一人の女として、新吾の心を占めて
いる。

「あまり、無茶をするな。浪路には浪路の覚悟もあるに違
いない。俺はあせらぬことにしている」

あせっては、我々にも、浪路にもよい結果をもたらさな
いと、京四郎からくれぐれも忠告されているのに、恋が、
つい、新吾を昌平橋に向わせる。

人の気持とは嬉しいもので、そんな新吾を知って、別に
頼んだわけでもないのに、普段、目をかけている岡っ引た
ちが働き出した。

彼らには彼らのやり方があって、中野家に入入りしてい
る、米屋、魚屋、八百屋などへ手をまわした。

こういう連中が接触するのは台所方だから、女中のこと
は案外、聞き出しやすい。

「旦那、ひょっとすると、浪路さまは昌平橋においでにな
りませんか」

三月に入って、すぐ、長次という岡っ引が知らせて来た。

この月、宿下りをもらって中野家から出て来た女中に、
出入りの商人が訊いたという。

「今年になって間もなく、向島に寮が出来て、そっちへ、

随分と奉公人が廻されたそうでございます」

浪路もおそらく、そっちへ行ったらいいというのであっ
た。

中野家の奥向きといっても、奉公人の数はかなり多いし、
宿下りの女中の話をどこまで信じてよいかも分らなかった
が、岡っ引たちは早速、今度は向島の寮へ探りを入れてく
れている。

定廻りのあと、新吾は單身、向島へ出た。いつまでも、
配下の岡っ引たちの好意にまかせておくわけには行かない。
舟で竹屋の渡しへ上るのを避けて、新吾は吾妻橋から迂
回して隅田川沿いの道をえらんだ。

源兵衛橋を渡るとすぐ右手に水戸様の下屋敷がある。左
手は川で、つい先頃までは向島の花見で賑わった水の上の
往来も、桜の散った今はひっそりと普段の夕暮に戻ってい
る。水戸様の下屋敷の塀が尽きると、葉桜になった並木が
片側にある。ここから道を逸れて延命寺の裏へ抜けた。す
ぐ、牧野備前守の下屋敷で、そこからは田や畑が続く、雑
木林がかたまったむこうに武蔵屋と大七の二軒の料理屋が
軒を並べている。

綾瀬川から流れ込んだ小さな川を渡って、長命寺の屋根

を遙かにみながら、新吾は用心深く中野家の寮へ接近して行った。

無論、万一のことを考えて、定廻りの服装ではなく、一度、屋敷へ戻って着がえて来たから、ちょっと見には本所あたりに住いのある御家人か、次男坊の冷飯食いか。

この辺りまで来ると田と畑が多く、人家は点々とするばかりで人通りも少い。花見の頃なら知らず、今頃だと案外人の通行が目立つ場所であった。

張込みや偵察には、まことに都合が悪い。

中野清武の寮は、思いの外に広かった。寮というより、大名の下屋敷なみである。

成上りの二千石では分不相応のものが、將軍家御愛妾の義父として、諸大名の役付にまで口を出し、實際、彼の舌先三寸で、更迭や拔擢が自在に行われているとあっては、要領のいい大名ほど、彼に贈賄することで幕閣に地位を得ようとした。

勿論、そうした風潮を苦々しく思っている硬骨の大名がないわけではないが、易きにつくのは人情で、中野家の門前には始終、諸大名からの貢物を運ぶ行列が絶えないといわれるほどである。

贈賄といえばきこえが悪いが、名目はいくらもあって、大名家なら参勤交代で出府したといつては国元の土産物を、国人りとなればその挨拶、或いは時候見舞、又は養女になつてのお美代の方が、出産したといえ、これ亦、莫大な祝いが運び込まれてくる。そのお美代の方の産んだ子の節句の祝、帯の祝、果てはこの大名と縁組が整つたなどと口実は尽きなかったし、實際、祝いごとにこと欠かなかった。つまりはお美代の方が一人、將軍の子を産むごとに大奥で勢力をのばして行つたのと同じ分だけ、中野家には招かずして富が蓄積されたわけである。

長い堀に沿って、新吾は中野家の寮を一巡した。

出入口は三カ所。

表門と裏門は東西になつていて、北側にもう一つ、これはあまり使っていないとみえて門番もおいていないし、門を入つたあたりに建物もなかった。

寮の中は、ひっそりとしていた。とにかく広すぎるし、新吾が巡回している間にも、門に人の出入りは全くない。

この中に、果して浪路がいるのだろうかと思ふは焦るまいと思ひながら、やはり焦つた。

といつて、この堀一つ、乗り越える力は、町方役人には

なかった。

「もし……」

いきなり、声をかけられて、新吾はふりむいた。

塀の曲り角で、思いもかけない近さに女が立っていた。

犬を連れている。白い大きな犬にも、頭巾をかむった女の姿にも、おぼえがある。

「犬塚新吾さま……」

里江が歌うように呼んで微笑した。

「珍しいところで、お目にかかりました」

夕暮の中に、里江の姿が匂うようであった。

藤の花を染めた振袖が大柄な里江によく似合う。

「このようなところで、なにをして居られます」とがめる口調ではなかったが、新吾は答えようがなかった。

「里江どのこそ、どうして、ここへ……」

「名をおぼえていて下さいましたか」

頬に血の色が浮んだ。

「私の寮が、やはり、この近くにございます」

「板倉屋の寮が……」

それは、以前、馬琴が招かれたところだと新吾は気がつ

いた。

「私、久しく、こちらへ参って居ります」

さりげなく近づいて、低声でいった。

「私と一緒に歩き下さいまし。見張られて居ります」

流石に、新吾は定廻りの心得で、そういわれても不用意にあたりをみまわすようなことはしなかった。

里江は塀に沿って、ゆっくり裏門のほうへ歩いている。

新吾も続いた。

裏門の前を通りすぎて、塀を再びまがる。まがって数歩行ったところで、里江がよろめいた。思わず、新吾が里江を支え、里江が新吾にすぎるようにして膝をかがめた。

草履の鼻緒でも切れたような恰好である。

犬が、きつと背後をふりむいて、耳をぴんと立てた。

男が二人、塀のふちをまがって姿を現わし、立ち止まっている里江と新吾に気がつくと、一瞬、狼狽してあとずさりをした。犬が低くうなる。

男達は顔を見合せ、そのまま裏門のほうへ姿を消した。

「おわかりでしょう。中野家の侍です。あなた様は、ここへお出でになった時から、もしかすると、それ以前から見張られているのでございますよ」

やはり、新吾にすぎたまま、里江がささやく。

「どうして、手前が見張られるのですか」

「それは、あなたさまがお探しになっていらっしゃるものが、この屋敷の中にあるからです」

ゆらりと里江が立ち上った。川に沿って別の道を歩き出す。

無意識に、新吾は里江の後に従っていた。

新吾のあとに犬が続く。

里江の足が早くなった。中野家の寮がどんどん、遠くなる。

「なんの事です。手前の探しているものは……」

口早やに問うたが、里江は微笑を浮べたまま、答えない。

白鬚神社の裏へ出て、そこで里江がふりむいた。

「八房……みておいで……」

犬へ命じた。

犬がさっと走って行く。待つ間もなく戻って来て、一声、啼いた。

「諦めたようですわ。もっとも、私があなたをお連れしたことはわかっているでしょうから、追う必要もないのです。うけれど……」

再び歩き出した。

「八房というのですか。この犬は……」

馬琴が書くところの「八大伝」の八房と同じ名前である。

「これが産まれた時、著作堂先生の八大伝の一の巻が大層評判になりましたので……」

すると、犬の年齢は、人間になおせばもう四十八、九になっっている。犬としては、老犬に近い。

「私と一緒に育ちました。ずっと……」

犬は、里江の言葉がわかるように見上げた。

犬とも思えないほど、眼に表情がある。

「私の家まで、お越し下さいまし。お話申し上げたいことが……いえ、あなたがおききになりたいことが沢山、ございます」

意味ありげにみつめられて、新吾はその気になった。

里江はどうやら、新吾が浪路の消息を求めて、あの付近を彷徨していたと知っている様子でもある。

里江の口から、浪路の手がかりがつかめそうでもあった。

又、それとは別に、この女には訊きたいこともある。

二度とない機会のようなであった。

「お供ししょう」

うなずいて、新吾は里江のあとに続いた。道が細くなつて、ここからは川がみえない。

こんもりした木立が夕映えのむこうにみえて、そこに人家があった。

門がぼつんとみえる。犬が先に走って啼いた。

犬の声が合図のように、黒い門がやがて内からあいた。門をあけたのは若い男で、老女が別に手燭を持って立っている。

「お帰り遊ばしませ」

ちらと新吾をみたが、別段、なにもいわず、そのまま先に立った。

新吾の背後で、門が鈍い音をたてて閉った。

「お篠……いつもの部屋がよい」

里江が老女に声をかけ、老女が心得て、植込みの中の小路を折れた。

そこに、枝折戸がある。

点々と踏み石が続き、綾瀬川をひき込んだらしい小さな流れがあった。

そのむこうに茶室風の離れ家がある。老女が重たげに戸をあけて先に入った。

行燈に灯を入れ、部屋の調度をあらためて出て来ると、
「どうぞ、お入りなされませ」

入口に小腰をかがめる。

里江にうながされて、新吾は先に部屋へ入った。

四疊半の小間で、普通の茶室と違ふのは、にじり口もなく、襖をへだてて次の間があるらしいことだ。

炉には、火が入っていて、釜がかかっている。

「一服、差上げましょうか」

里江が微笑して、炉の前にすわった。長く白い指が袂紗を鮮やかにさばく。

「浪路様とおっしゃいましたね」

湯加減をみて、おもむろに茶碗を前へおく。

「いつぞや、犬塚様のお宅にて、お目にかかりましたお方、中野様へ御奉公に上られたとか……」

「よく、御存知ですな」

「犬塚様のことなら、なんでも存じて居ります」

「ほう、それは、何故に……」

里江は答えず、作法通り、茶を点でている。

いつの間にか部屋の中に香の匂いがたちこめて、晩春の宵はそれでもなくとも艶めかしい雰囲気を茶室の中にかもし

出していた。

「浪路様を探していらっしゃいますのか」

ふと、茶筌の手を止めていう。

「そうです」

新吾はかくさなかった。

「実は、中野家に御奉公に上ったきり、たよりもなし、風聞によると、昌平橋の屋敷ではなく、向島の寮へ移っているらしいとききましたので、もしやと思い出かけて来ましたが、町方ではまさか、屋敷内にふみ込むわけにも参らず、途方に暮れていました」

「お好きなのでしょう。浪路様を……」

新吾は苦笑した。

「親の決めた許嫁でござれば……」

「そのようなお方を、どうして中野様へなぞ御奉公にお出しになったのです」

さり気なく、里江は核心に触れる問いを進めてくる。

「おそらく、行儀見習のためでしょう。浪路の兄がすすめられて、承知したこと……」

「新吾様は、お氣が進まなかった……そうでございますね」

正面へむき直って、茶を新吾の前へ勧めた。

「頂戴致します」

まろやかな味が旨かった。咽喉も渴いている。

「重ねて、もう一服、如何でございます」

「所望仕ろう」

再び、新吾に横顔をみせて、湯を汲んでいる里江をみている中に、新吾はしきりと浪路が思い出された。

「つかぬことをうかがうようですが、里江殿は浪路の消息を御存知でござろうか」

先刻から、自信ありげな、里江の態度でもある。

「はい」

里江が茶碗をまわしながら、うなずいた。

「浪路様は、あなたのお考え通りのところに、いらっしゃいます」

「どうして、それを御存知なのか」

「おみかけしましたもの。中野様の寮へ浪路様が他の女中達と入って行くのを……」

暮から正月にかけて、里江は体を悪くして、この向島の寮にひき籠っていたと、話した。

「たしか、あれは、一月の七草すぎとおぼえて居ります」

雪のちらつきそうな夕方、里江は日本橋の家から迎えが来て、駕籠で中野家の寮のわきを通りかかった。

「裏門があいていて、駕籠が五つばかり着いたところでした」

駕籠から女たちが下りて、裏門を入れて行く中に、浪路の姿があったという。

「間違いでござるまいな」

「新吾様のお許嫁を見間違えるわけはございませぬ。いっぞや、八丁堀のお屋敷をお訪ねしました折から、ずっと、新吾様を思い出すたびに、浪路様のお顔も、私の胸の中に深く刻みつけられて居りました」

茶釜の下炭火が小さな音をたてて崩れた。

二服目の茶を、里江の手が優しく動いて新吾の前へおく。長い指だが、ふっくらした柔かな手であった。気がついたことだが、里江はこの前、新吾が逢った時よりも、いくらか肥ったようである。

肩のあたりの線がやさしくなっていて、胸許は豊かにみえる。「浪路をごらんになったのは、その時だけでござろうか」

里江の視線に気づかず、新吾は訊ねた。

「はい、その時が一度きり……」

「では、必ずしも、浪路はあの寮にいるとは限りません」

なにかの用事で昌平橋から来て、里江の気づかぬ中に、再び帰ったということもあり得る。

「まず、その御懸念には及びますまい」

里江は、はっきりと断言した。

「理由は……」

「第一に、あの寮がすっかり出来上りましたのは、今年の正月でございます。それと同時に昌平橋からお女中やはらはしたやらが移って参りました」

浪路もその一人と考えれば、寮の中に奉公している可能性が強い。

「それに、あのお屋敷には女手がかなり要る筈でございます」

「客でも招かれるのか」

外側からはわからないが、中野清武が一年がかりで作上げたといわれる別宅である。内部はさぞかし、造作にも庭にも金のかかった立派なものに違いない。

それだけの別宅が完成したからには、客も招こうし、清武自身もしばしば、向島のほうへ来ているに違いない。

「それが、播磨守様には、滅多に向島のお屋敷にはお出でならぬそうでございます」

眼許だけで里江が微笑した。

「御主人様はお出でなさらぬのに、お客様ばかりがお立ち寄りになる。もともと、あのお屋敷は、左様なお客様のために作られたものと洩れきいて居りまする」

「客のためのもの……」

「新吾様は、この頃、大奥のお女中方の間で下総中山法華経寺詣でが大層、はやって居りますこと、御存知でございますうな」

新吾は、はっとした。

犬塚新吾は定廻り同心で役目違いだが、大奥の女中達が、参詣のために城外に出る時、町方がその警固に当ることは知っている。

近頃は、下総中山法華経寺内の智泉院というのが、お美代の方の実父が住職をつとめている寺として、大奥の信仰を集めていることも聞いてはいた。

参詣の女中達は、大奥を出る時は、お美代の方の御会釈があるので、旅立ちとはいえ、それ相当の正装をしていなければならぬ。

しかし、長い道中をそのまま駕籠で行くのは大変なので、城内を出ると然るべきところへ立ち寄って、着替えをし、楽な恰好で旅立つことが、いつの間にか慣例となっている。

着替えの場所は、さまざまで、今までは牛込七軒寺町にあった正栄山仏性寺というのが、現在、智泉院の住職をしている日啓にゆかりの寺ということで、大奥の女中達の便宜をはかっていたらしい。

が、向島に中野清武の別宅が出来てからは、もっぱら、そちらが大奥の女中達に使われるようになっていく。

中野清武といえはお美代の方の養父であるし、もともと、中野清武と智泉院の日啓とが懇意であり、その縁で、日啓の娘のお美代の方を大奥へさし出した因縁からいっても、大奥の女中達の智泉院詣でのために、わざわざ中野清武が向島に別宅を作って便宜を計ってやったというのも容易にうなずける。

大奥の女中達が頻繁に向島の中野家の別宅を使うとすれば、当然、その世話をする心きいた女中が、中野家として必要だろう。

浪路が、そのために向島の屋敷に呼びよせられているというのなら、格別、心配するにも当たらないわけであった。